



平成 23 年 4 月 22 日 金曜日

## 奈良県感染症発生動向調査還元情報（週報）

奈良県感染症情報センター  
（奈良県保健環境研究センター内）

**Nara IDSC**



### ● 今週の概要

■ 今週の感染症情報

■ 動物からうつる身近な感染症について① ～保健環境研究センターより～



（調査週） 平成 23 年 第 15 週 4 月 11 日（月）～ 4 月 17 日（日）

奈良県および二次医療圏別発生状況（奈良県上位 5 疾患）（5 週間からの動向）

順位	疾患	定点当り	奈良県	北 部	中 部	南 部
1	感染性胃腸炎	9.31	→～↑	→	→～↑	↑
2	インフルエンザ	6.05	→～↓	→～↓	→	↓
3	水 痘	1.17	→	→～↑	→～↓	↓
3	A 群溶連菌咽頭炎	1.17	→	→～↓	→～↑	↑
5	伝染性紅斑	0.80	→～↑	↑	→	↓

全県の動きと目立って異なる推移（定点当りの変化程度で実数ではない）を太い矢印で示す。

**県北部地区概況** 報告数 377 例は、前週報告の 271 例から一転増加。上位 5 疾患は、①感染性胃腸炎、②インフルエンザ、③伝染性紅斑、④水痘、⑤流行性耳下腺炎＝突発性発疹の順。インフルエンザの報告数（177 例）は、増加。感染性胃腸炎の報告数（120 例）も、増加。伝染性紅斑の報告数（23 例）は、やや増加。水痘の報告数（19 例）も、やや増加。流行性耳下腺炎の報告数（9 例）は、ほぼ横ばい。突発性発疹の報告数（9 例）も、ほぼ横ばい。なお、インフルエンザの定点報告の内訳は、奈良市 HC 管内 64 例、郡山 HC 管内 113 例で、前週報告より共に増加。郡山 HC 管内基幹定点から、マイコプラズマ肺炎の報告が 1 例（10～14 歳児）あった。また、郡山 HC 管内眼科定点からは、流行性角結膜炎が 3 例報告された。（村井 記）

**県中部地区概況** 報告数は 312 例から 353 例と増加した。上位の 5 疾患（14 週→15 週）は、①感染性胃腸炎（142 例→151 例）、②インフルエンザ（106 例→141 例）、③水痘（25 例→22 例）、④A 群溶連菌咽頭炎（18 例→21 例）、⑤伝染性紅斑（4 例→5 例）であった。インフルエンザは 14 週より増加した。眼科定点からは、流行性角結膜炎 1 例の報告が葛城 HC よりあり。基幹定点からの報告はなかった。（徳田 記）

**県南部地区概況** 報告数（第 14 週→第 15 週）は 85 例→87 例と推移。報告のあった疾患は①感染性胃腸炎（39 例→55 例）、②インフルエンザ（29 例→15 例）、③A 群溶連菌咽頭炎（10 例→12 例）、④突発性発疹（0 例→4 例）、⑤咽頭結膜熱（0 例→1 例）。（柳生 記）

## 【動物からうつる身近な感染症について① ～保健環境研究センターより～】

ヒトには従来から、微生物に対して自然に備わった抵抗力（免疫）があり、通常はこれらの微生物による病気にかかることは少ないのです。しかし、近年の地球の温暖化による気象変化や、国際的なヒトや動物・物の移動の活発化や、都市開発による住環境、生活様式の変化、またペットの多彩化を要因としてヒトと動物が接触する頻度は急速に増加しています。そのため従来は動物固有の、あるいはヒトにまれと考えられた病気がみられるようになりました。今回は、数回にわけてどのような病気があるのかについて紹介いたします。

### イヌからうつる病気

イヌからうつる病気としては“**狂犬病**”がよく知られています。全世界では約5万人/年の死者が発生し、発症すると治療がなく非常に死亡率の高い病気です。ほとんどは野良犬に咬まれたことが原因ですが、ヨーロッパではキツネ、アフリカと南米ではコウモリ、北米ではアライグマ、スカンクなどからも狂犬病はうつります。日本では予防接種が普及し、また島国という地理的条件もあり、1950年代以降、国内での発生はありません。しかし、2006年にフィリピンに滞在中の日本人2名（京都府、神奈川県）が相次いで感染を起こしたことは記憶に新しい出来事です。

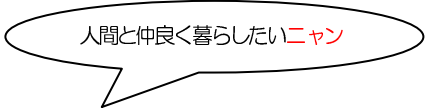
次に、聞きなれない病名で実態も不明なところが多いのですが、国立感染症研究所の調べによると国内では2002年以降で14名が感染したとされています“**カプノサイトファーガ感染症**”があります。これはイヌやネコの約半数の口の中に住みついている、カプノサイトファーガ菌という細菌が感染する病気です。



### ネコからうつる病気

ネコは室内のみで飼育することは少なく、戸外で自由に生活する“地域ネコ”とよばれる飼育形態が一般化しています。そのため野良ネコ、鼠、鳥類との接触による病気の持込が多いと考えられています。例えば、ネコに寄生するネコ蚤に含まれるバルトネラ菌による“**猫ひっかき病**”や、ネコの口腔内のパスツレラ菌による“**パスツレラ症**”などが知られています。いずれも咬まれたり、引っかかれたりすることで傷口から菌が侵入し発病します。

稀ですが、ネコはトキソプラズマを持っている鳥類やネズミを捕らえて食べるため、時として便中にトキソプラズマを排出します。妊娠初期の妊婦が感染すると胎児に深刻な影響を与えることもあり、ネコの排泄物の処理には注意が必要です。



#### イヌ・ネコに対しての注意点

- ・咬まれたり、引っかかれたりした後、体調に変化があれば早めに病院へ相談しましょう。
- ・触れあいや、排泄物の処理の後には、しっかりと手洗い、うがいに心がけましょう。

（保健環境研究センター 記）